

3. 『源氏物語』千年紀— 記念展示によせて

『紫式部日記』寛弘五年(1008年)11月1日条に、次のような文章があります。

左衛門の督、「あなかしこ、このわりに、わかむらさきやさぶらふ」と、うかがひ給ふ。源氏に似るべき人も見えたまはぬに、かの上は、まいていかでものしたまはむと、聞きみたり。(口語訳:左衛門の督が、「失礼ですが、このあたりに若紫はおいででしょうか」と几帳の間からおのぞきになる。光源氏の君に似ていそうな方も見えにならないのに、まして紫の上がどうしてここにいらっしゃるのですか、と思って私は聞き流していた。)(引用は小学館、新編日本古典文学全集『紫式部日記』に拠る。)このように「若紫」、「源氏」と、『源氏物語』の登場人物が記録の上で初めて確認されます。その年から今年は1000年目。この節目の年を記念して今年も京都を中心に「源氏物語千年紀」のイベントが多数開催されています。今回のシンポジウム及び展示もこの「源氏物語千年紀」を記念したものです。

この展示に、日本語日本文学から学科所蔵の古典籍のうち三条西家旧蔵本をはじめとして、『源氏物語』に関連する古典籍およそ三十点を展示いたします。三条西家旧蔵本のうち、展示する古典籍の多くは室町時代に書写されたものであり、『源氏物語』の写本や、『源氏物語』の注釈書、系図など『源氏物語』に関連するものを幅広く取り上げました。『源氏物語』の写本といっても、その大きさや形状が異なるものがございます。袖の中にも入るような小さなサイズのものから、『源氏物語』一帖分を三巻の巻子本に仕立てたものまで、『源氏物語』の享受のあり方は多様であったことが、その形からお分かりいただけるかと思えます。

また、『源氏物語』よりも以前に作られた古典作品のうち、『源氏物語』にも影響を与えている『古今和歌集』や『伊勢物語』、ほぼ同時代に作られた『枕草子』も展示いたします。特に研究史上重要なものである、三条西家旧蔵の天福本『伊勢物語』と能因本『枕草子』も展示いたします。いずれも学習院大学図書館のホームページで紹介されておりますが、私たちが古典として享受している作品がどのように書写され後世に残されてきたのかを、ぜひ実物を御覧いただき確かめていただきたいと思います。

では、展示の一部を具体的にご紹介いたします。室町時代に書写された『源氏物語』の注釈書で「光源氏物語」(写真2左)と題された十四冊の本がございます。その十四冊の初めの一冊に『源氏物語』の最初の巻である「桐壺」があるのですが、その桐壺巻の部分だけが取り出され、「桐壺」(写真2右)と題されて、おそらく江戸時代に新たな一冊の本として書写されています。写真を見ただけでは一目瞭然ですが、「光源氏物語」は小型の本、「桐壺」は大型の本です。『源氏物語』が時代を超えて、読まれ、勉強されていた証でもあります。このようにまったく違うサイズの本に作り変えることがあったという良い例でもあります。平安時代に書かれた物語が、室町時代から江戸時代へ、そして現代へと受け継がれてきた歴史を、この展示から感じていただければ幸いです。どうぞ皆様、お話しあわせのうえ、ご来場くださいませ。

(勝亦志織)



写真1 「伊勢物語」



写真2 「光源氏物語」・「桐壺」



左隻



右隻

4. 近世源氏絵の世界から— 史料館本「源氏物語画帖貼交屏風」 の紹介

華やかな王朝世界に彩られた『源氏物語』を描いた絵画は(源氏絵)と呼ばれ、その今伝わる数多くの作品は、この物語がいかにかたくさんの人々に求められ愛好されてきたかを、私たちに語りかけてくれます。ことに近世初期には様々なスタイルやバリエーションを持つ作品が、正系の土佐派や狩野派といったいわゆる一流の絵師だけでなく、彼らの周辺で活躍した者や、町絵師と呼ばれるような多様な描き手によってつくりだされました。ここに紹介する「源氏物語画帖貼交屏風」も、そうした近世源氏絵の受容と制作の、広やかな裾野に位置する一例です。

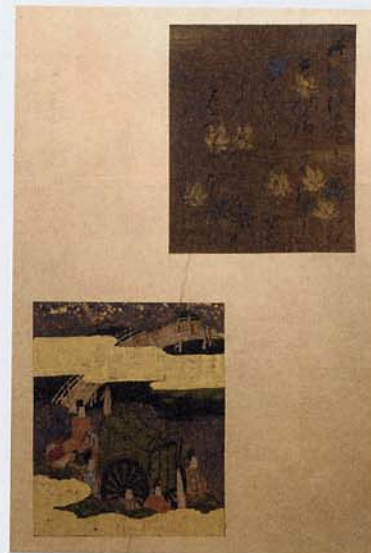
本作品は、詞十葉・絵十葉の画帖が貼り付けられた六曲一双の総金地屏風で、全五十四帖のうち、右隻には「御法」「橋姫」「行幸」「若菜上」「鈴虫」、左隻には「常夏」「幻」「竹河」「梅枝」「夢浮橋」の計十場面が順次貼られています。詞書と絵の色紙は各帖一葉ずつのセットで隣り合っており、詞章内容と絵画場面はおよそ対応関係にあります。縦長型の画帖の大きさはいずれも揃っていることから、もと冊子本の形式であったものが仕立て直されたと考えられるでしょう。

続いて絵画表現に目を向けてみると、土佐派による細密画の作例が想起されるような、やまと絵の雅味を感じる描写が確認できます。人物の面貌部分は特に剥落が進んでいるのが惜しまれますが、穏やかでやさしい顔立ちが、細かな描線の引目鉤鼻、僅かに朱がさされた口元、滑らかな顎の丸みの輪郭によって形作られています。またやや古様な趣を持つ金雲・金霞は、画面の上下を支える役割を未だ果たしており、構図やフレーミングに優れたセンスもみることが出来ます。その一方で、建物や細部装飾にしばしば認められる素朴な表現、樹木を描く重い筆致、泥絵具的な色感など、御伽草子の作例を思わせる描写も共存しています。こうした要素からは、土佐派の絵画を学んだ町絵師を、描き手に想定することができそうです。制作期はわりあい早い江戸初期頃であると思われます。

さて本図の興味深い点としては、それぞれの帖からどの場面を絵画化するのにあたり、比較的珍しい場面が選ばれていること

が挙げられます。例えば「幻」には、あまり絵画化例のない、御仏名の導師の僧を源氏がねぎらう場面を、「夢浮橋」は浮舟のいる遙か向こうの谷を、薫の行列が通る様子をクローズアップで描いているのです。土佐派の主流である光吉や光則の画帖には見出せないこれらの場面の源泉を辿ってみると、伝土佐光元筆とされている作品との親近性が指摘できます。土佐光元(1530-69)は光茂の子で、いずれも画風が異なるいくつかの作品が彼の筆と伝えられています。そのなかでもことに室町末期から桃山時代に掛けて作られたとされる京都国立博物館本の「源氏物語画帖」と、当作品の場面選択と図様は、人物を大きく描く点、近接拡大の構図という特質も含め、通じているといえるのです。先に挙げた雲霞の表現も合わせ、この土佐光元筆の伝承作品に近い、やや古様な「伝」土佐派の系譜のなかで制作された作品であることも、本作の特質を考えるとときに見逃せないものでしょう。

(岡本麻美)



左隻 第六層部分「夢浮橋」